

21世紀日本人図

写真学科
勝倉峻太

Japanese People of the 21st Century

Department of Photography
KATSUKURA Ryota

新しいポートレートとは何か？ その問いに対し、多くの写真家が何かしらの方法で顔を隠すなど、誰かを特定させない方法を取った。それは被写体の固有名詞を解らなくすることによって普遍性を生み出すことに繋がった。誰かを特定する要素が欠落したことにより、見る人の想像力を掻き立てる効果も産む。

一方、写真の専門家が撮影したものではなく、誰が撮影したのか分からない昔の記念写真に代表されるファウンドフォトがひとつのジャンルとして確立した。ファウンドフォトは顔がはっきりと写っている写真であっても、撮影されてから時間が経ったゆえ、固有名詞はなくなり、誰が写っているかどうかではなく、どれも「昔の写真」として見える。

写真は時間が経つと自然と固有名詞が無くなり、その時を記録できるという根本的な魅力が発揮される。撮影されてから時間が経つほど、その魅力は増す。例えば江戸時代に撮影された写真はどれも興味深い。今でも写真の中で生き生きとした江戸時代の日本人に会える。

時間が経てば、写真を写真として見てもらえるなら、私は誰かが分かる写真を撮りたい。これから数百年後へ、21世紀に日本で生きた人間の代表として自分の周りにいる人達を写真に残したい。私が撮影したポートレートをその人の関係する場所で、その人が書いた文字と共にもう一度、写真に納めた。

**“The first day of October on an auspicious day in 2008,
16×20 camera was finally made”**



**“At Seven-Five-Three festival:
Wearing a double buckle of Kamen Rider 000 and Fourze.”**



“Got a broken nose from a mosh pit.”



“The Rose that we grew are in full bloom again this year.”



